

サトイモに寄生するミナミネグサレセンチュウの防除について

第1報 種いもの浸漬処理

岩 橋 哲 彦

(宮崎県総合農業試験場)

IWAHASHI, T.

Control of Root-lesion Nematode of Dasheen.

(1) Soaking Method of Seed Tuber.

サトイモのミナミネグサレセンチュウ (*Pratylenchus coffeae*) 防除については、定植畑での殺線虫剤による防除は普及しているものの、種いも寄生線虫の防除については実用的方法が確立しておらず、種いもからの線虫持ちこみによる被害は軽視できない現状にある。その防除対策として、種いもの薬剤浸漬処理について検討し、若干の知見を得たので結果の概要を報告する。

第1表 各種薬剤の浸漬処理効果

供 試 薬 剤	稀釈 倍数	浸漬 時間	線虫数(収穫時)	
			試 I (1975)	試 II (1976)
D E P 乳 剤 50%	200	30	76	555
“	500	“	140	546
M E P 乳 剤 50%	200	“	67	263
“	500	“	252	457
M P P 乳 剤 50%	200	“	104	80
“	500	“	187	212
ダイアジノン乳剤40%	200	“	34	20
“	500	“	80	116
メソミル水和剤50%	200	“	38	4
“	500	“	40	88
カルタップ水溶剤50%	200	“	0	0
“	500	“	13	0
CG-223 乳 剤 50%	200	“	3	0
“	500	“	0	0
無 処 理	—	—	187	822

注) 線虫数は根辺土壌、細根、子いも表皮からの検出虫数の合計値。試 I : 11月9日薬剤処理後1/5000ポットに定植、加温温室で管理し80日目に調査。試 II : 4月8日薬剤処理後催芽、5月6日定植、9月14日収穫調査。供試種いも線虫寄生程度少～中(表皮5g当り5～50頭)。

試 験 方 法

供試種子はミナミネグサレセンチュウの寄生した品種石川早生。薬剤処理は、供試薬剤の所定濃度液に種子(1区10個体)を浸漬し、所定時間処理後ただちに催芽ふせこみおよび定植を行ない、収穫時に根辺土壌20g、細根5gおよび子いもの表皮5gについてペールマン法により線虫を分離し(3～5反復)、ミナミネグサレセンチュウの検出数によって効果を判定した。なお、生育および収量についても調査し、被害の有無を検討した。

結果ならびに考察

供試種子の線虫寄生程度によって防除効果に差異がみられたが、効果が安定して高かったのはカルタップ水溶剤およびCG-223乳剤の200～500倍、30分～1時間浸漬処理で、線虫寄生の比較的多い種子でも効果が認められた(第1、2表)。浸漬時間も短時間で効果が認められ、作業能率の面からも実用的と考えられる。被害も特に認められないことから、種子浸漬処理と定植畑における殺線虫剤処理の組合せによって、本線虫の防除が期待出来るよう考えられ、実用性についてさらに検討したい。

第2表 カルタップ水溶剤の浸漬処理効果(1976)

供 試 薬 剤	稀釈倍数	浸漬時間	線虫数(収穫時)
カルタップ水溶剤	200	0.5	0
“	500	“	0
“	1,000	“	8
“	“	1	2
“	“	3	1
無 処 理	—	—	294

注) 4月8日薬剤処理後定植、9月17日収穫調査、供試種いも寄生程度少(表皮5g当り5～20頭)、線虫数は第1表に同じ。